

発音しにくいのは困るから、歯はやっぱり取っておくか。飲まず食わず出さずということは、トイレットパーの心配どころか、トイレそのものがいらさないんだから、トイレ掃除当番でもめることもない。緊張したときの下痢止め即効薬を買いに行く必要もなくなるぞ。

この崇高なる思考に反して、ぼくのお腹はさつきからグーグーギョルギョル、不平不満を連発している。しかも、こいつは味にもうるさいときている。それはお腹じゃなく舌か。いや結局は脳かな。

かあさんが札幌に行つてすでに二週間半。その間に一応ぼくの姉である麻が料理をしたことは一度もない。姉らしいことは一切しないから、姉ちゃんと呼ぶのはとつくにやめた。とうさんに抗議したら、

「麻はオレに似て、家事音痴なんだよ。しかたがないさ」
つていう情けない答えが返ってきた。

とうさんは麻に甘い。麻は、弟のぼくにはえらそうにするくせに、親や他人を操るのがうまい策略家なのだ。かのマキャベツリだつて孫子だつて、田中麻にはコロツとだまされたにちがいない。

最初の一週間は、だれも作らないからぼくが作った。料理を作るのはきらいじゃないし、得意でもある。けど、毎日ぼくが作つて片付けもやっているうちに、だんだん腹が立ってきた。くそつ、ぼくはシンデレラじゃないぞ。

麻なんか、「ごくろうさん」なんてえらそうに言つて皿をトレーにのせて自分の部屋にさっさと持つていく。食べ終わると、ぼくがいない間にこつそり流しに置きに来るだけだ。せめて食器洗い機に入れるとか、「ごちそうさま」ぐらい言えつての。

だからチャットで宣言した。(今後、料理はボイコットする!) っつて。ふつうそこで、「じゃあ交代制にしよう」つてなるだろう。ところが麻はスルー。

とうさんが作つた料理は泣きたくなるほどまずかつたけど、ぼくは気を遣つて無理に食べた。あとでごみ箱を見たら、ふたりの残飯がそっくりそのまま入つていた。むちゃくちゃ腹が立つた。

それ以来、毎日コンビニ弁当かデリバリー。せいぜい冷凍食品をチンするだけ。ぼくは学校の選択制の給食を選んでいるから平日のランチはいいけど、夕食と週末のランチは毎回もめている。

外に食べに行くという手もあるけど、この辺は閑静な住宅地で店なんかほとんどないし、車はあるけど自動運転じゃないし、とうさんはペーパードライバーだ。

今まで、かあさんは仕事をしながら家事も完璧にこなしていたけど、さぞ大変だっただろうな。

ぼくはワイシャツのアイロンがけに一苦勞している。とうさんと麻はパンツと靴下以外はなんでもクリーニングに